「ともに考え、話し合う」道徳授業のための情報誌

あかつき道徳通信

教授用資料

No.8
2019年3月7日

巻頭コラム 中学生時代　思春期の入り口
横山 利弘（元関西学院大学教授）
実践レポート 全校道徳！　６人の生徒とともに考える道徳授業
池田 和幸（青ヶ島村立青ヶ島中学校副校長）

巻頭コラム

中学生時代　思春期の入り口

元関西学院大学教授　横山 利弘

いまだ大人ではなく、もはや子どもでもない時代、それが中学時代です。大人と子どもの中間期を思春期と言います。早ければ小学校高学年で思春期に突入しますが、大半は中学時代であると言われています。確かに、中学生を子ども扱いすると「もう子どもじゃない」とむくれます。ところが大人扱いすると「まだ大人じゃない」と言うのです。都合よく大人と子どもを使い分けるのですが、考えてみると、自分のことがよく分かっているとも言えるでしょう。

身長、体重、身体機能などの面では中学生はほぼ大人に近くなりますが、精神面ではまだ大人との差は大きく、これは主に生活経験の不足から来るものと考えられます。

生活経験とは、文字通り生活の中での体験をもとに得た知識や技能を意味します。実生活においては、様々な人々の意志が複雑に錯綜しており、善意も悪意も、親切もいじわるも、他利も利己も、およそ人間のもつ善と悪の全てが複雑に絡み合っています。もちろん、中学生にも中学生なりの生活経験はありますが、その絶対量が圧倒的に不足しているだけではなく、質においてもその厳しさは一般的には軽減されています。主な点は責任の問題と生計の問題です。中学時代が、やがて責任をもって社会生活を送り、責任をもって家庭生活を送れるようになるための準備期間であり、モラトリアム（猶予期間）と言われる所以です。

しかし、このような状況にあるがゆえに、多くの大人が実生活の中で失いがちな純粋さを中学生は維持しています。その特徴は、世の中も人々の生き方も理屈通りであるべきだと思っているところにあります。人は清く善意で生きるべきものと思っていることから、中学生のもつ純粋さは単純さに通じます。つまり、混じりけがなく、考えも大人のように狡猾な者は少ないのです。一方で、やがてそう遠くない将来に、自分も精神的にも社会的にも独り立ちしなければならないことに気付いてもいます。それゆえに自分はどうやって生活を築き、どのような考え方で生きればよいのかという問題に自信がもてずに不安でいるのです。

精神的に独り立ちするための試行錯誤を繰り返す中学生は、分かり切ったことに関わっている時ではありません。それゆえに、分かり切ったことしか発問しないような授業は内面において馬鹿にするのです。しかし、彼らはまだ、いつでもどこでも誰にでもあてはまる行為基準を求めている段階で、いわば、数学的な公理や定理のような道徳を求めています。道徳的価値の人格的な深さや彩の実存的な決意性には気付かない段階です。しかし、それはそれでよいのです。中学生は、自立してこの世界の中に自分の立つ位置を獲得するためのスタート地点なのですから。

しかし、中学生にふさわしい授業をするためには、授業で中心となる道徳的価値について少なくとも教師はより深く知っていなければなりません。

全校道徳！　６人の生徒とともに考える道徳授業

青ヶ島村立青ヶ島中学校副校長
池田 和幸

はじめに　青ヶ島村は日本で一番人口が少ない村である。全人口約 160 人。東京から南に約 360㎞、太平洋に浮かぶ小さな島である。周囲は断崖絶壁で囲まれ、海しか見ることができず、まさに絶海の孤島と呼ぶにふさわしい島である。現在中学生は６人、併設の小学校が５人と、小中学校あわせても児童・生徒数 11 人の極めて小規模な学校である。

少人数学級では、採点等の事務に費やす時間が少ない、個に応じた丁寧な指導ができる等のよさがたくさんある反面、４０人の学級にはない難しさが存在する。少人数学級では、人数の少なさから、多様な考え、価値観に触れることが難しい。加えて、ほぼ島民全て知り合いのようになり、新しい出会いは旅行者や異動してくる教員くらいで、人間関係の固定化が見られる。そのため、この人はこういう人であるという固定観念が強くなり、より一面的な見方、考え方になりやすい。

道徳の時間は、様々な立場や考え方を理解し、多様な考え方に触れることによって、自分の価値観を見つめ直し、よりよい生き方について考え直す時間であると考えている。超少人数の学校においても、考えを深めることができるのか。手探りながらもまずは様々な考えに触れさせることが大切であると考え、１１月より全校道徳の定期実施を行うこととした。

教材名　誰かのために

主題名　生ききる姿勢

ねらい　末期がんの母親が娘を思って、弁当を作っていたエピソードから、母と娘の思いを通して、母と子の絆の深さと、限りある命を精一杯生きることの大切さについて考えを深める。

内容項目　生命の尊さ〔中学校Ｄ・(19)〕
生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。

対象学年：中学校全学年
出典：「私たちの道徳　中学校」（文部科学省）

授業の構想

■主題設定の理由

授業実施前に事前アンケートを行った。道徳の時間を好きと答えた生徒は１名のみであり、５名はどちらかというと否定的であった。理由として「きれいごとが多い」「答えがないというのに、答えを求められている」等、道徳の時間に対する拒否感が強い。

本校の道徳の授業は、通常学年単独で実施している。１年生２名、２年生１名、３年生３名という学級構成のため、授業において、ほぼ教師と生徒１対１の授業になってしまっている。教師の道徳的価値についての理解不足や、教材の読み込み不足等、指導についての課題も多いが、学級の人数が少ないため、多様な考え、価値観に触れて考えを深め、自分自身の生き方を見つめ直すことが、普段の授業においてあまり出来ていないことが大きな課題である。

また、生徒同士が近い関係にあるために、思春期特有の本音を出すのは恥ずかしいという雰囲気になることがある。特に学年単独では、考えた意見を素直に出すが、全校では真剣に考える様子を見せないことがあり、指導の難しさがある。

本教材は、雑誌に掲載された医師鎌田實氏の文章である。余命３か月の命を宣告されながらも、子どもの卒業式を見届けたいと１年８か月を生き、２人の子どもの卒業式を見届けて亡くなった母親が、最後立つのもやっとだったはずなのに、お弁当を作って送り出すというエピソードを基にした、家族の愛と命の素晴らしさについて書かれたものである。

生徒全員で一斉に話し合いを行うと、恥ずかしさで考えきれないことが予想された。そこで、生徒２人に教師１人が入った３人の小グループを作り、各グループ担当の教師がそれぞれのグループの話し合いを主導する形をとることにした。まずは、自由に話し合うことができるように、グループ担当教師には自分の思いや体験談を織り交ぜながら適宜、発言に対して問い返しをしてもらうようにした。グループで話した内容を共有し、全体でそこからもう一度追発問を行い、生徒の考えを深めることができるように工夫した。

また、授業のねらいは内容項目を「生命の尊さ」としているが、教材の特性上、関連項目である家族愛の視点から考える生徒も多いことを考慮した上で幅広く捉えられる発問を考えた。

教材の内容（あらすじ）

●２人の子どもをもつある女性が余命３か月と宣告された。しかし彼女は「子どもの卒業式まで生きたい」と願い、１年８か月を生きて、２人目の子の卒業式を見届けてから亡くなった。亡くなる少し前の最後の外出で、もはや立つこともできないはずの彼女は台所に立ち、学校に向かう娘におむすびのお弁当をもたせた。彼女を支えた思いは何なのか。「誰かのために」と願うことで生まれる希望について考える鎌田氏のエッセイ。

	学習活動	発問と予想される生徒の反応	指導の留意点
〈導入〉	■本時の主題にかかわることについて考えたことがあるか確認する。	○「生きる意味」を考えたことはありますか。	生徒の反応等を踏まえて、「どんなことを考えたのか」を問う。
〈展開〉	教材を読む。 ■教材の内容を確認する。	○登場人物や話のあらすじを確認してみましょう。 ・スキルス胃がんで母親は末期症状だった。 ・余命３か月だったのが、１年８か月生きる。 ・家に帰ると必ずお弁当を作っていた。	教材を範読する。 簡単に末期がんの状況等について触れる。
	■グループでこの教材について思うことを話し合い、全体に発表する。	○この教材を読んでどんなことを思いましたか。 ・すごい。 ・母の思いがすごい。 ・生きる力には希望が大切なのかな。 ・自分にはできない。	各グループ担当の教師が、司会をしながら意見交換をする。教師も一緒になってどう思ったかということについて話をする。
	■お弁当を通して、母と娘の思いについて考える。グループで話し合った後、全体で共有する。	○お弁当に込めた母の思い、受け取った娘の思いはそれぞれどんな思いだと思いますか。 〈母の思い〉 ・今自分にできることはこれしかない。 ・しっかりと食べて健康に過ごしてほしい。 ・元気に過ごせるようにしてほしい。 〈娘の思い〉 ・自分を思う母の思いが強い。 ・母に愛されている。 ・身体がつらいのに申し訳ない。	グループで出た発言をまとめるのではなく、それぞれの考えについて、グループの教師は問い返しをしながら、興味深い発言を広げ、深める。
	■バトンタッチしたものについて考える。グループで話し合ったのち、全体で共有する。	◎お母さんが子どもたちにバトンタッチした大切なものとは何だろうか。 ・一生懸命生きること。 ・母親の愛情。 ・家族を思う気持ち。 ・自分が今できる精一杯をやること。 ・命の大切さ。	前の発問を通して考えたそれぞれの思いを十分に踏まえながら、考えを深めていく。
〈終末〉	■本時の学習を振り返る。	○今日の授業を通して考えたこと、感じたことを書きましょう。	自己評価や全校道徳の振り返りについて書かせる。

生きる意味

誰かのために

・意味がある。

生きろ。⬇長生き。

頑張ってもらいたい。

⬇生きること。

子どものため。

⬇少しでも愛情を。

母の思い 娘の思い

・大切なもの。

・楽しく食べたい。

・うれしく、せつない。

・ありがとう。

最後に。

具合が悪い。

大切なもの

・おにぎり

・暗黙のルール

・私を忘れない。

命は長さではなく

精一杯生きる。

命　愛

実践を振り返って

（T：教師、S：生徒の発言）

■母の思いと娘の思いについて（グループで出た主な内容）

グループ1

〈母の思い〉

・おにぎりには意味があるんだよ。

〈娘の思い〉

・温かいお弁当が食べたい。

・泣いて食べたくない。楽しく食べたい（最後だから）。

グループ2

〈母の思い〉

・子どもに頑張ってもらいたい。

・生きることを子どもに頑張ってもらいたい。

・子どものためにという思い。

〈娘の思い〉

・食べるのをためらう（大切なものだから）。

・うれしくてせつない。

グループ3

〈母の思い〉

・生きる（娘には長生きしてもらいたい）。

・娘に少しでも（これから愛情をかけてあげられないから）愛情をかけてあげよう。

・元気に過ごしてほしい。

〈娘の思い〉

・ありがとうおかあさん。

・最後に愛情をかけてくれてありがとう。

・具合が悪いのにありがとう。

■バトンタッチしたものについて

グループ1

・家庭にある暗黙のルール。

・私のことを忘れないでという思い。

グループ2

・命は長さではないこと。

・精一杯の気持ちで必死に生きることの大切さ。

グループ3

・愛（家族への愛、娘への愛、お弁当に込めた愛）。

・命（生きてね、大切にしてね）。

・一生懸命生きてね。

→グループで出てきた内容を受けて

T：愛ってどういうことなんだろう。

S：愛は見返りを求めないもの。

T：普通は見返りを求めるものなの？

S：見返りを期待するけど、愛はそういうものがいらない。

T：精一杯生きるってどういうことだろう。

S：つらくても一生懸命頑張ること。

S：最後まで命を尽くすこと。

■生徒の振り返りから

・誰かのために生きたいと思った。余命3か月の宣告から1年8か月も生きてすごいと思った。

・奇跡というのは、本当に起きるんだと思った。また、母はやはり強いと思った。

・生物が生きる本当の意味→子孫を残す。子孫にバトンをつなげる意味がわかった。

・母親ってすごいと思った。

・一生懸命生きることってすごい。

・この母親は最後まで生きててすごいな。

■授業を終えて

①小グループでの話し合いについて

小グループにすることで、話しやすい雰囲気が作られた。意見交換が多くなされ、一定の効果が期待できることがわかった。6人とはいえ、全体となった時にあまり前向きに意見を出せないという生徒の実態に対して一定の成果が上げられた。各グループに教師が入ることにより、ファシリテーターの役割を担ってもらうことができ、生徒だけで話し合いをさせるよりも、深まりのある意見交換になった。

課題としては、生徒同士で話し合いを進めるためには、もっと機会を増やし、慣れさせなければならないことである。他の教師が入り、人数を増やし様々な考えに触れさせつつ、慣れていくことで、生徒同士の発言のやりとりが増え、生徒同士の問い返しによって、グループの思考を深めていくことができると考える。

②道徳的価値にせまる授業について

教材が生徒の心に訴える力があるものだったので、授業後、ある生徒は「今日は道徳の時間からずっと母の思いについて考えてた」と、給食の時間に漏らすなど、いつもよりも生徒の心に響いていたようだった。授業後の振り返りでは、家族愛に関して書いている生徒が多かったが、話し合いの内容として、精一杯生きることの大切さについても出てきていた。もっと、道徳的価値について焦点化し、発問によって掘り下げていきたいという願いはあるが、生徒の実態を考えると、難しい。日々よりよい授業の実践を積み重ね、道徳の授業に対する前向きな気持ちを育てながら、より生徒一人一人が道徳的価値について考えを深めていけるように、学校全体で努力していきたい。

あかつき道徳通信　No.8　教授用資料

発行　廣済堂あかつき株式会社
本資料の内容についてのお問い合わせは、小社編集部　（TEL :03-6435-6690）までお願いします。

廣済堂あかつき
〒176−0021　東京都練馬区貫井4−1−11
TEL :03-3577-8966　　FAX :03-3577-8967

バックナンバーは、下記HPでご覧いただけます。
http://www.kosaidoakatsuki.jp